



新編女水滸傳

四之卷

^ 13
3561
4



門へ13
 號 3561
 卷 4

新篇女水滸傳卷之四

浪速 好花堂主人野亭著



第七回

清治會ト婦獲療眼奇方
 頃齋影猿腸論解體大槩

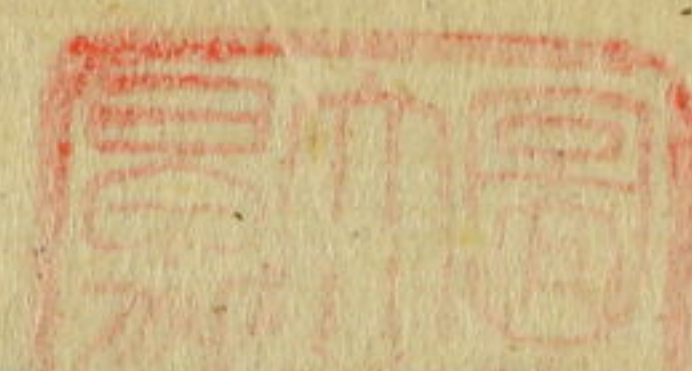


話説國の清次ハ松浦監物が饒恕を得て道芝を救ゆとれを義清及
 横女ト遠魂的の余逢が如く雀躍して悦びる時小清治義清の如
 云々ハ異を扶同小其業等が行方を尋ると雖も今小を所在不
 如斯徒然小居諸を殺さ恐るる吾侪宿志を達せし其期を失ふ如
 居を轉じて筆奇を廻して人播及此の知故ものせむ那里根をな

女水滸傳卷之四

早稲田 大學 図書館
 346.3 類
 藏 書

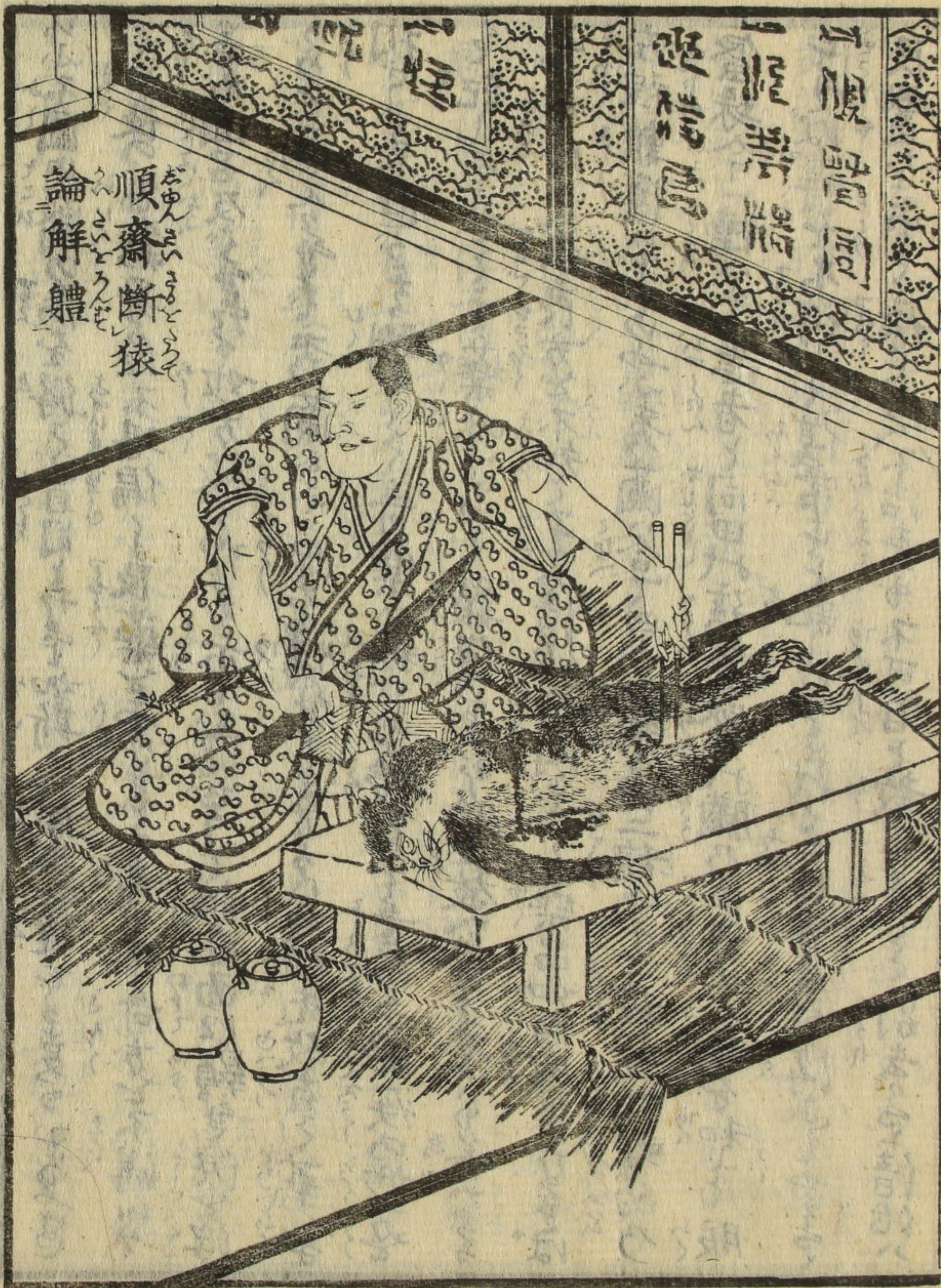
いふ義清唯々々々主臣五個連袂着使航小舟搭を七々播及(赴
ふ小舟中少々義清海風吹せそ風眼病を治疾しるが於尚座の更
なることと心少々おぼるが旬余の目を弥々播及へ看船せり小眼疾い
く爲梗内障眼の症とわづ明を先ふりる様女が熱々清治夫婦が致した
大勢あつと雖も施せぬ術なく先辰野小近と卯中小齋故を尋ひ
一軒の茅屋を賃得り爰に住し種々心を用ひ醫酒を求む小僻陋の古きれが
さる良醫もなく隣邑小池内順斎といふ州匠醫人有り先向時お捨
置人よと煩斎老不托しそを且暮調薬を送り越々雖も経日効驗
も見へざる如斯く清治は符些小く仕馴たる猫を業とてく程近々
山谷に分入専ら免猪を射回つ道芝様女等ハ義清が侍病の間小麻草す
物縫など聊清治が芳を扶け朝夕の烟を立たるる或日清治山猫の歸



路宿と近た邑迄来は似小稠人立集ひたきを何更あやと隙視ハ一個の
女者命年三十許なるが身小道服を着予小菟目州を持種々談命なれ
是即女伎の秀蘭也清治は輕く是人を感ひ確貝ト者たる人小のり錢
を費其の更よはゆたかから二三言を聞小舟舌さるふしくを休せと論
まゝ更隨る神小通じん々感伏しく彼去此来筆を乞ふ者多きを清治は
深く賞嘆し義清が病氣乃愈不愈を問ふ思衆人の去を待裡稍々小
散ましそは進々寡く頭を低しく曰先刻るを賢婦の命を説ふを聞て
僕も一筆を煩却が思へ見玉如く片錢の代賃なり僕をせと一度止ま
と思推しせと又逢なる期を不知む翼々ハト直を乞ふ貸く一筆を貸じ
玉くせと最毎據言しそを秀蘭曰我トを賣と雖も價の有とを不論
只人の益有人を思ふのなれと錢なく共筆を惜む者小非ぞと云れ

清治益々大度を感じて、己の年廿男が氣運を占ひ玉ふと、
 秀蘭筮を撰へ卦を配して曰此人本訪候乃種なれ共婦女の爲小身を過て
 今ハ丈夫と零落と音小清治を的中する小駭れ控同く曰仰る処誠小
 毫髪を遠く此人當時難病小苦しめて治不治の別を考へ玉ふなりといふ秀
 蘭點をて曰此卦面を考へる小離の中又陰儀変じ陽儀とたふ小則卦を
 乾と説卦傳小曰離を目と乾を敬ふは是眼をぬぐは敬ふとぬを放
 ちて海の家有此病必ら眼疾なり然も今ハ黒目并ぶる更た小難れ
 盲者と成たる是八歳月の夏苦に氣血渴了たるより起す難治の症也
 氣運ハ西三年にゆく期有なりといふ説聞しれを清治大と小悦び君が
 談命に詳なりが家更古の管輅が下に不出今ハ何を包むだ此小僕
 が主君にゆい故有る零替の身弁を出身此期を待て一日三禮の思を

小不圖内翳の病を得て盲目とす如斯く夙志を達する更もかあるは
 日夜の悲愁見ると不堪偏く良薬を需せどもあらず奇方と不得い
 君も聞召及ぶる方なりといふも示し玉ふなりと誠忠面々顯き涙を浮
 うめと聞えをせ秀蘭もて忠を憐れとて我祖先故有る華金を
 相せ更直がす酬とて奇薬の秘書を授けて書中不眼疾の妙を
 記しきとて薬味つら難獲ものかれを教へ参らせくも益やある
 外ハ未良方と不知と音小清治推同く薬品如何成るのなまは
 左程難獲いざらふ秀蘭もて曰く薬品二種也二種ハ九孔螺的乃
 蜃珠今一種ハ患者と同里孩兒の腎臓乃主血之右二種を和して服
 せば一時を不待して復常と記したるを二品容易に得ぶしきとて
 良醫を求め療じ去不治更も不可有と教示着と別去るを清治ハ



藥品の難得を聞くに昔々々々家小ゆふ道きく熟思ふ小子清き
 正しく己の年に出産せしむ一種の調り然しなご月の中花の替り
 老育し猛秀が家子忠義故と言やか生血を志不マと如何と
 是くても定むる宿業ならんが去ふも彼屋珠を難獲多き
 兎や角沈吟々程か君家以歸着晩餐を食く急ぐべ
 醫酒師順育が方に行り九孔鯉魚の子に辰珠的とり侍り
 順育眉頭小皺を寄屋珠多し雖も九孔の鯉魚は子に物有ま
 不知ても何の為ふ尋ねらるる問清治曰人の尋し小依り問侍り
 たる順育曰足下此方の患内醫者なむを去る小用いんをさか
 唇言有るも足下の貧窮を悲む得るか人と云小清治冷笑若
 隨分黄金調り心は問を玉り知るせむせと談話傍を見侍り

肉磁頭は犬を猿を置たり清治指す那猿は何小か多と問順育曰
 猿膽は能諸病小効なり仍て鹿下を思ふは足下も山獵を業と志玉
 万一能かを得まらば何時か膽を取法をさるるぞ大換り猿
 解るも熊を解るも法は一人に余人の秘をば交れ共足下は正直人
 なむを教授せし然し能を得玉かなを些の配錢を越されなご強欲
 夏いひけり枝を去り腰をゆるたあご白猿は五臟六腑大聚人似
 是を語の柄善見置玉と腸を探出し是ハ心的是ハ腎的と遂一小示
 清治子細小見定まると又問順育泰しく述べ清治謝り
 貴老の示し小をも多し益を得たり右の屋珠を的見玉何卒知
 玉の頼り置順育小辞しく家小ゆふを日毎小屋珠を尋りも
 せり知人更なるるを清治益々を告じり且祝清治村の文里正

宇文太^{うぶんた}らう^{らう}者^{もの}有^ありて^て近^{ちか}邑^{むら}五^ご箇^か村^{むら}を^あら^ら家^け富^と榮^え何^い不^ふ足^{そく}や^まま^まの^の
 あれ^いも^も京^{きやう}分^{ぶん}負^ふ欲^{よく}邪^{じゃ}曲^{くわく}の^の小^{せう}人^{にん}や^や稍^{せう}も^もき^きを^を村^{むら}民^{たみ}を^をせ^せげ^げこ^こが^が利^りを^を
 と^と討^{たう}マ^マリ^リ故^{ゆゑ}人^{ひと}皆^{みな}敵^{てき}讎^{しゆん}の^の如^{ごと}く^く忌^い憎^{ぞう}も^も此^こ宇^う文^{ぶん}太^た何^い頃^{かた}の^の程^{ほど}も^も接^{せつ}女^{にょ}と^と見^み初^{はつ}
 欲^{よく}火^ひ身^みを^を焼^やく^く淫^{いん}念^{ねん}禁^{きん}じ^じご^ご何^い事^{こと}して^{して}妻^{つま}を^をま^まえ^え思^{おも}ふ^ふも^も有^あり^り夫^{つま}者^{もの}と
 つい^つ清^{せい}治^ぢ又^{また}利^り欲^{よく}小^{せう}迷^ま入^に男^{おとこ}な^なく^く何^い如^{ごと}く^く可^か為^な術^{じゆつ}た^たく^く且^{かつ}多^た心^{しん}を^を世^よを
 り^りが^が一^{いつ}日^{にち}常^{じやう}小^{せう}来^き魚^{いさな}家^か者^{もの}と^とれ^れを^を宇^う文^{ぶん}太^た自^{みづか}己^か立^た出^でて^て何^いう^う有^あり^りと^と四^し小
 魚^{いさな}家^か曰^い今^{いま}日^{にち}ハ^ハ魚^{いさな}價^{あひ}賤^{せん}く^く諸^{しよ}方^{かた}して^{して}多^{おほ}く^く鬻^う今^{いま}ハ^ハ牧^{まき}の^の棘^{きよく}鬻^う二^{ふた}箇^かの^の鯉^り
 の^の賣^う残^{ざん}ハ^ハ此^こ螺^ら一^{いつ}箇^かハ^ハ九^く孔^{こう}有^あり^り頗^{おほ}奇^き成^な物^{もの}と^と白^{あか}河^かの^の法^{ほふ}皇^{わう}熊^{くま}野^の井^い瀑^{はく}底^{てい}
 小^{せう}放^{はな}ち^ち玉^{たま}は^は由^{よし}是^{これ}也^{なり}と^と承^{うけたま}り^り如^{ごと}斯^{ごと}珍^{めづ}希^{めづ}の^の螺^らな^なれ^れを^を肉^{にく}ハ^ハ美^{うま}小^{せう}く^くを^を
 玉^{たま}ハ^ハ孔^{こう}小^{せう}漆^しく^く飲^{さう}器^きと^とし^し玉^{たま}ハ^ハ賓^{あひ}客^{かく}の^の美^{うま}供^{かみ}が^が為^なり^りと^と口^{くち}車^{くるま}リ
 棄^あら^らせ^せく^く宇^う文^{ぶん}太^た價^{あひ}を^を定^{さだ}め^め鯛^{たい}と^と鯉^りを^を買^{かひ}取^とれ^れを^を魚^{いさな}家^かハ^ハ謝^あり^りと^とし^し

宇^う文^{ぶん}太^たハ^ハ接^{せつ}女^{にょ}ガ^ガ夏^{なつ}を^を忘^{わす}れ^れの^の樽^{しやく}々^々と^と不^ふ樂^{らく}折^{せつ}な^なを^を此^こ魚^{いさな}で^で一^{いつ}盃^{はい}を^を
 喫^くし^し樽^{しやく}を^を敵^{てき}人^{にん}と^と婢^{めかけ}小^{せう}命^{いのち}と^と庖^{ばう}丁^{てい}を^をり^り小^{せう}那^な九^く孔^{こう}の^の螺^ら乃^{なり}中^{ちゆう}小^{せう}粒^{りゅう}の^の辰^{てん}星^{せい}珠^{しゆ}
 有^あり^りを^を婢^{めかけ}ハ^ハ何^いあ^あぐ^ぐと^と見^みの^の宇^う文^{ぶん}太^た是^{これ}を^を見^みく^くと^と天^{てん}我^{われ}ハ^ハ此^こ奇^き物^{もの}を^を
 玉^{たま}ハ^ハ何^い様^{やう}藏^{ざう}擯^{へん}て^て善^{ぜん}價^{あひ}を^を求^{もと}む^む數^{かず}枚^{まい}の^の黃^{わう}金^{きん}を^を得^えたり^りと^と十^{じゆ}鼓^こ女^{にょ}と^と人^{にん}リ
 逢^あ毎^{まい}小^{せう}語^ごと^と聞^きせ^せく^く悟^ごじ^じら^らが^が一^{いつ}日^{にち}地^ぢ内^{ない}順^{じゆん}脊^{せき}基^きを^を圍^いま^まと^と宇^う文^{ぶん}太^たが^が宅^{たく}に^に至^{いた}
 了^り小^{せう}宇^う文^{ぶん}太^た室^{しつ}小^{せう}詰^{じつ}じ^じと^と其^{その}名^なを^を初^{はつ}め^め三^{さん}西^{せい}局^{きよく}と^と圍^い止^と婢^{めかけ}を^をと^と彼^か辰^{てん}星^{せい}珠^{しゆ}を^を
 取^とり^りせ^せく^く順^{じゆん}脊^{せき}小^{せう}見^みせ^せる^るを^を順^{じゆん}脊^{せき}只^{ただ}顧^こ視^しと^と曰^い此^こ辰^{てん}星^{せい}珠^{しゆ}若^{ごと}聖^{せい}人^{にん}何^いを^を賣^う
 玉^{たま}と^と問^と小^{せう}負^ふ欲^{よく}の^の宇^う文^{ぶん}太^た首^{くび}肯^{うづ}て^て曰^い如^{ごと}何^いあ^あも^も估^たたり^りと^と九^く孔^{こう}の^の鯉^りハ^ハ辰^{てん}星^{せい}珠^{しゆ}
 な^なれ^れを^を價^{あひ}賤^{せん}く^くハ^ハ讓^{じやう}と^とし^し負^ふ數^{かず}次^じ少^{せう}と^と免^{めん}角^{かく}も^も中^{ちゆう}たり^りと^と順^{じゆん}脊^{せき}ガ^ガ白^{はく}
 買^{かひ}人^{にん}有^あり^りと^と雖^なも^も但^たし^し分^{ぶん}負^ふ民^{たみ}な^なれ^れを^を如^{ごと}何^い詩^しの^の黃^{わう}金^{きん}を^を估^たたり^りと^と承^{うけたま}り^りと^と後^{のち}
 紹^{しやう}分^{ぶん}を^をど^どと^と宇^う文^{ぶん}太^た聞^きと^とも^も負^ふ人^{にん}か^から^らを^を支^し調^{てう}す^す價^{あひ}を^をり^りと^と無^な益^{えき}と^と

小を順齊又曰貧人なきとも若九孔の蜃珠のちを随分耶移しく賞人と
 ちやいなをさす用意可有先價を聞し玉、宇文方曰然くも廿金小賞べし
 を高貴の人け登るるも數百金ともりなれども貧人とあきを特異小賤
 直中、然し貧人、何者、ちと、同順齊則清治が頼り、頼末を語れ、
 宇文方、まを低く、曰清治、ちを瀆なくとも、まに、然し、此方、お、登、
 貴老、何卒、ちを討て、玉、ち、成、就、さ、る、お、ひ、て、賞、金、を、ち、ち、と、聞、
 り、れ、を、順、齊、自、末、大、欲、的、の、漢、あ、き、を、是、を、聞、く、滿、面、笑、を、合、く、夫、ハ、如、何、
 ち、ち、ま、ち、や、と、聞、小、宇、文、方、順、齊、が、耳、小、口、よ、せ、接、女、を、幸、小、さ、越、さ、を、
 蜃珠を送り、ま、ち、と、ち、順、齊、領、ま、て、曰、然、く、を、清、治、小、面、會、ち、ま、を、討、
 ち、ま、ち、ま、ち、お、ち、て、八、先、の、詞、を、忘、せ、玉、な、宇、文、方、曰、夫、ハ、夜、し、も、疑、ふ、ま、あ、れ、
 先、早、く、清、治、小、會、ち、商、議、さ、ち、と、急、ぐ、し、れ、を、順、齊、欣、然、く、清、治、方、

へ、ち、ま、ち、却、説、清、治、の、薬、品、の、蜃、珠、半、に、ち、を、あ、ち、ゆ、り、神、備、小、衣、扇、
 しく、昼、夜、心、を、苦、し、む、ち、順、齊、来、れ、を、欲、醫、又、藥、金、の、不、足、を、催、促、り、
 来、し、ち、や、と、掩、鼻、思、へ、も、迎、て、寒、暄、の、礼、話、を、順、齊、清、治、小、向、ひ、て、い、く、
 頃、自、頼、置、玉、の、妓、某、子、に、ち、を、時、来、を、委、し、ま、ち、此、家、に、明、し、ち、我、方、
 へ、来、玉、と、ち、と、未、不、同、終、小、清、治、胸、裏、く、許、歡、喜、厚、く、謝、し、ち、曰、貴、老、の、尊、
 意、謝、ち、ち、言、ち、し、ち、同、伴、仕、ち、と、勇、も、ち、を、順、齊、も、喜、悅、の、色、を、露、
 清、治、を、仔、ひ、く、急、ぐ、ち、こ、が、ち、ち、と、同、室、小、仔、ち、清、治、を、座、せ、ち、を、
 低、く、し、ち、曰、九、孔、の、蜃、珠、の、藏、主、大、保、正、宇、文、方、主、之、僕、不、圖、せ、ち、ま、を、彼、
 蜃、珠、を、一、見、し、ち、下、の、尋、ら、ぬ、の、様、を、語、れ、ち、宇、文、方、主、の、云、ち、除、他、の、人、
 ち、ち、を、數、百、金、ち、ち、ち、估、す、れ、ち、清、治、が、望、ち、ち、を、價、小、不、及、ち、ち、
 ち、我、又、清、治、小、所、望、ち、接、女、を、我、妻、小、致、し、ち、此、ま、ち、小、許、諾、を、辰、皇、玉、

珠ハ謝義小基きんとてさうゆ如く富有人あきまへ價小てハ不估挿子
 唐山ハ不知此邦小二粒とあり奇品かきを能思惟を決して唯諾なり
 最仰小言りる小清治た黙然とて居たりしが稍有之曰芳志畏奉侍
 然し接女主ハ實ハ我主君の愛妾たす夫我存を以て決し難しゆ
 商議か一田耗ヤ之暫時待志なりと言ふ順舟曰須臾ハ見合とたれ
 ど由宇文方ハ頗依性急の人なきを移時て之更可不成と言を巧りして
 言ふれを清治諾して碎し去りるが道路をさう思るハ如何小主君のため
 かるとも宇文方如きの賤人小主君の寵妾を汚さる人小口惜さ支あり
 されど彼蜃珠又可有とも不覺と沉吟しるが心を決し一旦蜃珠小
 宇文方小基主君の病だ小瘡あぞ繳納さるる計策たさふも可有
 と心小點きて宿ふゆと潜小接女を呼く後小推小行低声小言りる小置

不敬なるとも雖も千方小心を盡し君出兩所を本國へ返奉さるる人
 寢食の間も忘却たすつら然る思ひぬ主君の眼疾今小由縁糸の
 期未必とも盲人と何の詮なく爰小治るるさ妙薬ゆきとも世無双
 奇薬中價萬溢的を積とも賞得てさるると藏主市身が物
 小深く思をみ那妙薬と交易せんと至む小臣士を嚙泥を吐くとも君
 を他人小渡し母を思ひ侍せし如何小支那妙薬なくとも主君ハ生涯埋
 木キも清治が百計爰小窮るる施さるる術をあはれ可憐義清君の
 由ると思ふ假小耶人の方行するも主君の眼病だ小瘡玉如何あは
 方便をぬきと再々添し参らせ向須臾の辛苦と思ひ承引玉の心と
 涙を浮り理を盡して頼も聞えれを接女小よと泣く數行の涙を止
 めしが須臾有る言りる是迫妾夫婦をさむ玉る鳩恩親切須弥山

程低く其倉真海尚浅し既小此此少く圖書と云ふ人小棄肉なる
 身を由身が恩情ゆへ虎口を逃し道芝主小多くの難苦をけ侍を
 しも時し由身を捨く救はると思侍りし斯く六面伏たせし天地の
 中に無此可憐君の為小身を穢く原よるを妾が所其身ををたしも
 厭ひ侍りし最も健氣小言あまう愁涙小むせよ射八雨小撃ゆて
 落の如く風小破ゆ海棠小似たることと鉄腸の清治を魂消はごとく
 泪をこらしひ白くはまも許諾玉ひたる節を捨く節を立心は比小希
 な系貞操くと只管小賞嘆し急ぎ順存が方小行黙頭をせし熱さを
 語りもむ順存勇力と悦び速く宇丈太が許小行く夏の原委とつげ
 れぬと宇丈太千舞足の踏を不知心浮起り憶らく是月下の赤繩を
 結びぬ系あつて出雲の神れ媒分るごとく順存を數度賞し貴老乃

芳心により夏既小成就せし六重く賞錢を酬ふ然し何日か戀君を贈
 りまや順存曰明日愚老書子とせし清治が方小行く約せらるる
 宇丈太を速ちる古又を喜悦し構心をなせし順存八辞し家ふるごとく

第八回

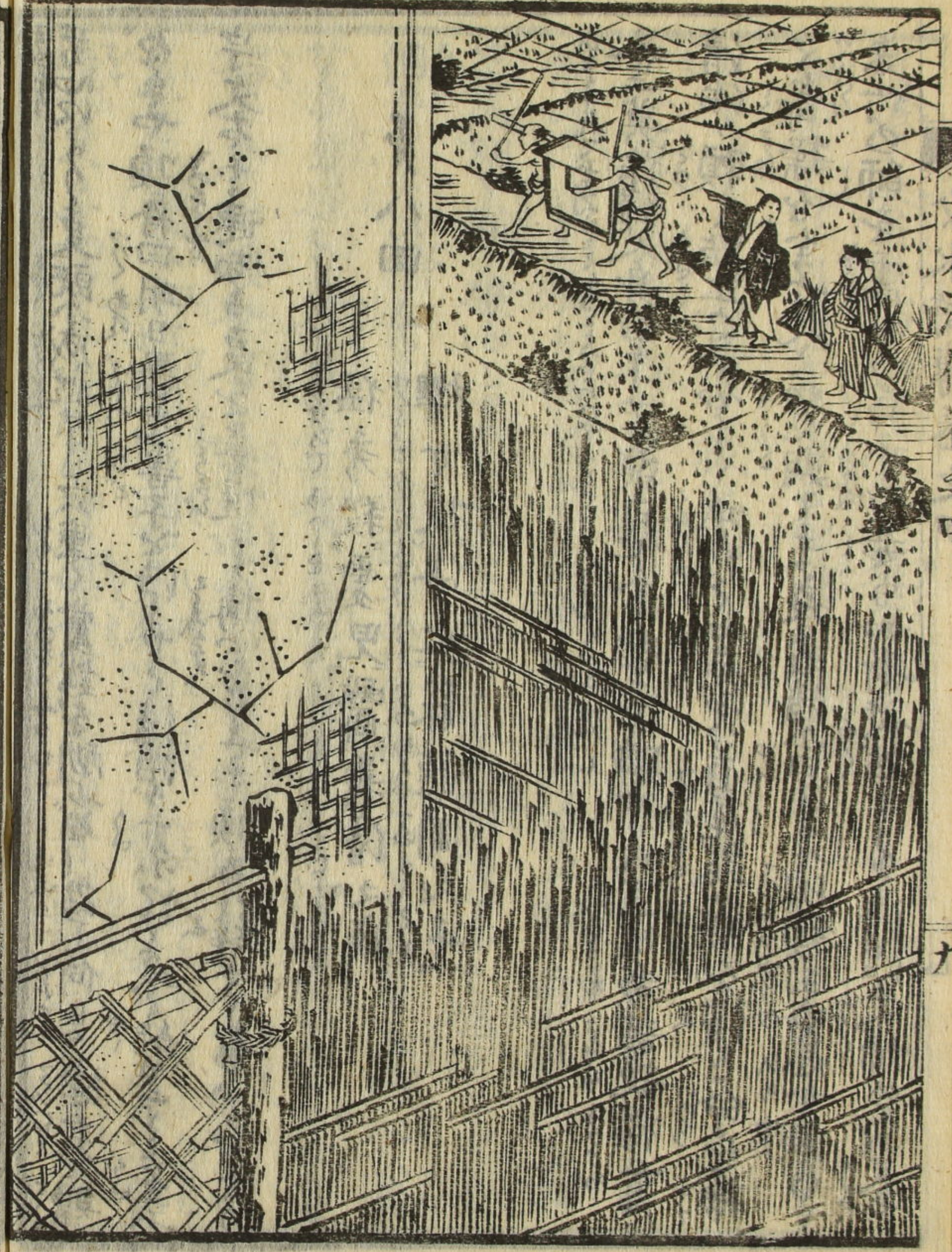
猛秀殺愛兒醫義清之疾
 櫻女投海水蘇龍圍之手

人生莫作婦人身百年苦樂由他人之樂天が賊せし八直成哉語説櫻女ハ
 清治が頼り點止がく心ゆく承引り心庭の首尾能樂を得る命を捨
 け節操を全せし覺期しし夜義清小白く八頃領玉の息女偏ゆ
 系竹の師を需りし由承存妻由如斯徒然と清治主婦の人ハ養



義清
おろちて
零落
患内
醫

大正博六



大正博六

生んた如何やも氣の毒小思侍をを領主の女師となりて此の黄金
 を得せり君の藥直的乃たしとせし聊清治主此肩休もなを
 ありと夫婦のふ小商議されい固く宿し去り君得意して夫婦の
 人小仰あて承引ぶる支を侍り可憐回金くしとのぬ志言をり
 胎塞る袖もちり還泣を清治夫婦と隠聴着と腸を絶
 思ひせると義清の眼盲たを何の心も不着しと曰来しと心はさ
 清治一人おし五人の口腹を養ふと難義あふ小不圖亦業病的
 何れ萬其の費多く心を苦しめん我を日頃氣小病きと幸け支之
 我を意とせ以奉ふ小行がし清治の我能ふ人速呼ゆり小松女
 心得く清治を招けむとわく度したる義清昂松女が奉公を登由
 言回せしを清治伴と削しと曰昨日も松女君如斯宜くとも何ぞ奉公

小行玉小及ぶ道芝ハ見り身の身か松女君在り侍病小支をりし
 此義止ち玉りふを義清押返し志嬉りせが我休意かれを松奉
 仕小まうてまういふが清治と左程小思ひ玉り當時領主の姫の師と成
 後へも同小君と全快し玉り芽出度歸奉の朝小逢玉りり答り詩
 容の粹あをを義清悦の尚ほり談話く此夜ハ至臣團楽し酒燕を
 かり深更乃り各目房小余を程なく夜明と松女心愁然あが用意
 をあひ小頃齊早くも一挺の肩輿をほせり入来りれを松女早冥府乃
 使者来目心地く潛声小泣倒を清治の義清小知さじと目語く是を
 削し義清小領主の迎官来を告了を義清由今更惜別げ小探り出
 叔曰く聲我患病かるとも是を意とせ健小勤仕主の意不禮と支
 なく然し奉仕の間有る時々耗息を聞せると声響りく書りれを

主の目盲まを不見との少身虫弱性少く見たまの胎患しあど
 言の積を設入の氣の毒を食圖や進め参らせ後火を照らす
 乃いさふさふを参らせ今所も義清を揺醒し進められ義清も
 起し飲盡し扱々是ハ心もらる薬哉と言詰亦不終一聲呵と呼令
 手足を張向乱れ清治夫婦敬寫を驕が滋る水も糧糧内稍平氣
 附く曰く今此藥を服されも忽然五臟燃るが如く苦しうが最早
 心氣收りたを終し尚嘔吐の氣味頗あれを須臾安臥せんとす
 引よそと寝たりり道芝ハ障子さしよそと火を点し清治向ひてい
 更小紛き尋侍らるも清太郎如何なる侍らる又桜女君を親
 慕く不別ふらる預めゆらるも尋ねれ清治曰く否清太郎ハ
 爰ふらる懐中を一枚の紙をよめしと道芝ハ渡やぞ打笑く何を

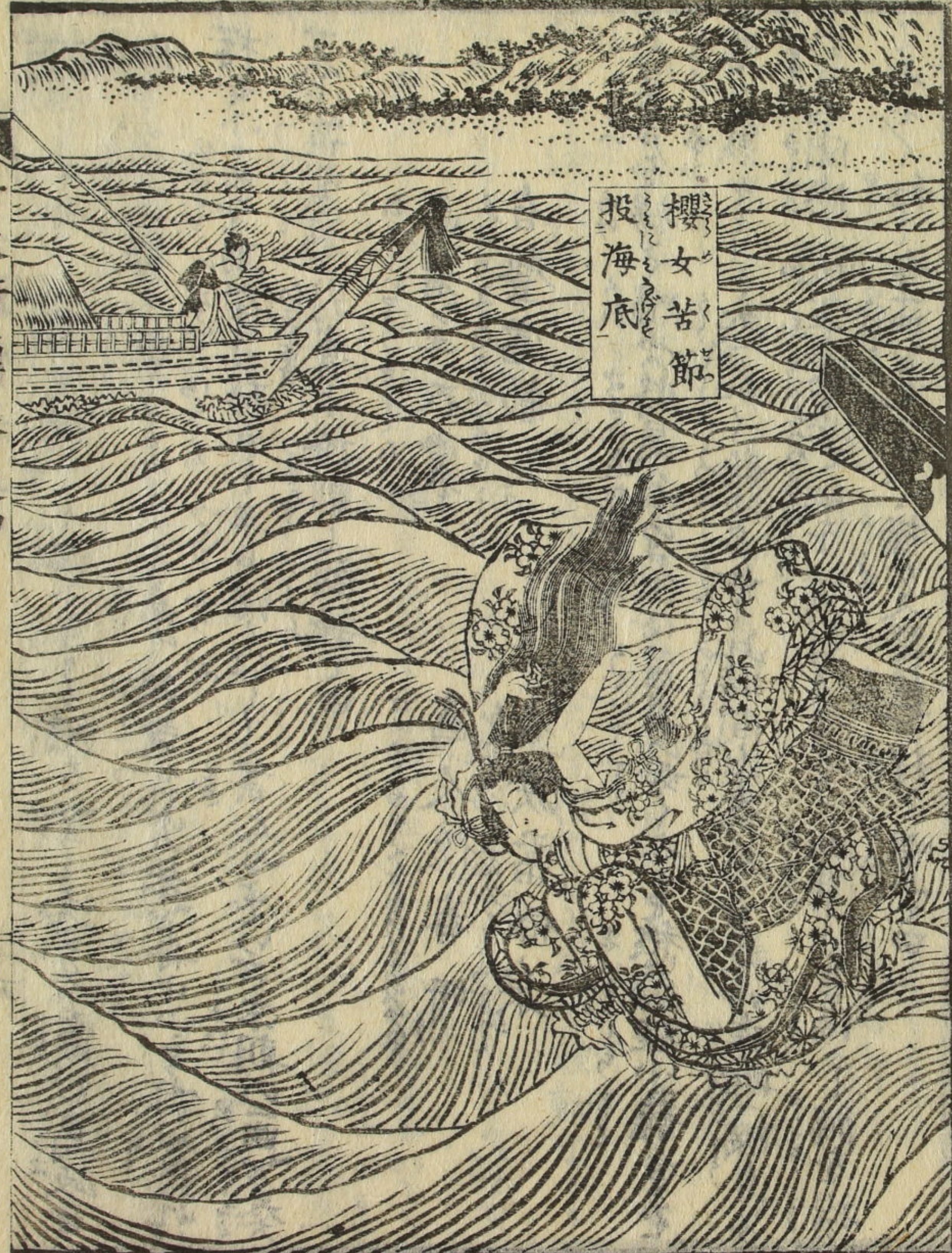
戲毛を燈ふに寄く讀見をも清幻童子と記せ戒名ハ心かざらる
 是ハ誰が見の法号ぞ候哉と急々尋問れ清治潜然と涙を流
 清太郎ハ藥に成り早死なす又斯々の顛末と那ト婦が藥を極し
 たらと宇大夫が桜女を慕ふを幸い屋珠的小交易途して清太郎刺殺
 僧を憑り假小法名を賜し延壽不語を聞せられ道芝ハ只狂乱の如く
 声を放つ痛哭るが彼戒名をいし抱きよ相り情がよも産生せし
 十日中天暗健不養三月歸仕の期いしを父母小見せ参らせ悦びまを
 見まふく此歲月の眞喜も吾子の成長ふ志し音は小は日ふり
 愛しんをいを見の度小我が好見を持し心程ハ自許しんを
 知の存せんと支壽ハ冬も綿被ふらむ暮し日を送きも昔の衣を
 襲衣を逃廻り泣呼ぶを吐き送り艾を灼生行末の無患を祈きんを

瘡瘡と瘡く病果くいそぐを授びし小薬のむく死にたてりいそぐ
 だもと不知しど今日可死と知ありむをわぬ中欲ぐり菓子木實と
 思ふも後得るそよを悲しやと泣倒きてハ猛秀が襟之をばと採り藥
 のふ可殺ハ何とぞ預り打明し惜別をせむ玉りぬや未練止毒毒
 ぞし思ひ玉り怨めや今朝出しし時の間も氣きし心を何故ふ察し
 てハ玉りぬと恨く歎くも縹言を固居も清次ハ眼を固齒を切ちり
 百千無量悲難の涙小流しし声響けり言るハ由身が恨善理かると
 むの申小言國を歎死やそん去るも如斯と知るも快くハ服臣
 然省てハ夫婦が年月の忠誠を画紙とあぐん心強くと陰慮し様女主乃
 亦暮を幸と抱りりく立出ハ藥のふ刺殺を殘忍成りてとちり
 泣止く笑へる面を見し時ハ何成なりと思ふや蜃珠を交收ゆるさの伴

掬しりり寝させんか死忍小抱行刺殺とぞ腕節のむひきも可為
 業ある割ハ腹中を切つて死先頃順育が襟を解く亦せを思ひ併せ
 臓腑を採り生血を絞る取むる鬼とせむ死残思の業宿世如何成
 悪報少く如此直苦を見ゆゆんそし強勇ハ猛秀と熱淚を流して
 悲歎する夫妻が歎を聞ゆる義清一室を走り出板ハ我故をりて
 骨肉の急息を殺せりも多由如此と察せむ無益の此身自刃しり
 夫婦小言を言せりせすを我り罪の深きと悔歎を清治前しりて
 宣ひて驚風急病と死せりも無是非況や君のふ命をせむも又
 戦場ゆく陳設せりもも抜群勝り忠為たり將又我等夫婦が
 為ハ希世至孝かせむ能化尊の引導を濁く黄金の膚を磨ぐ
 更生前各誓死後景報此上や候なき夫ハとせむ君が眼疾如何あり

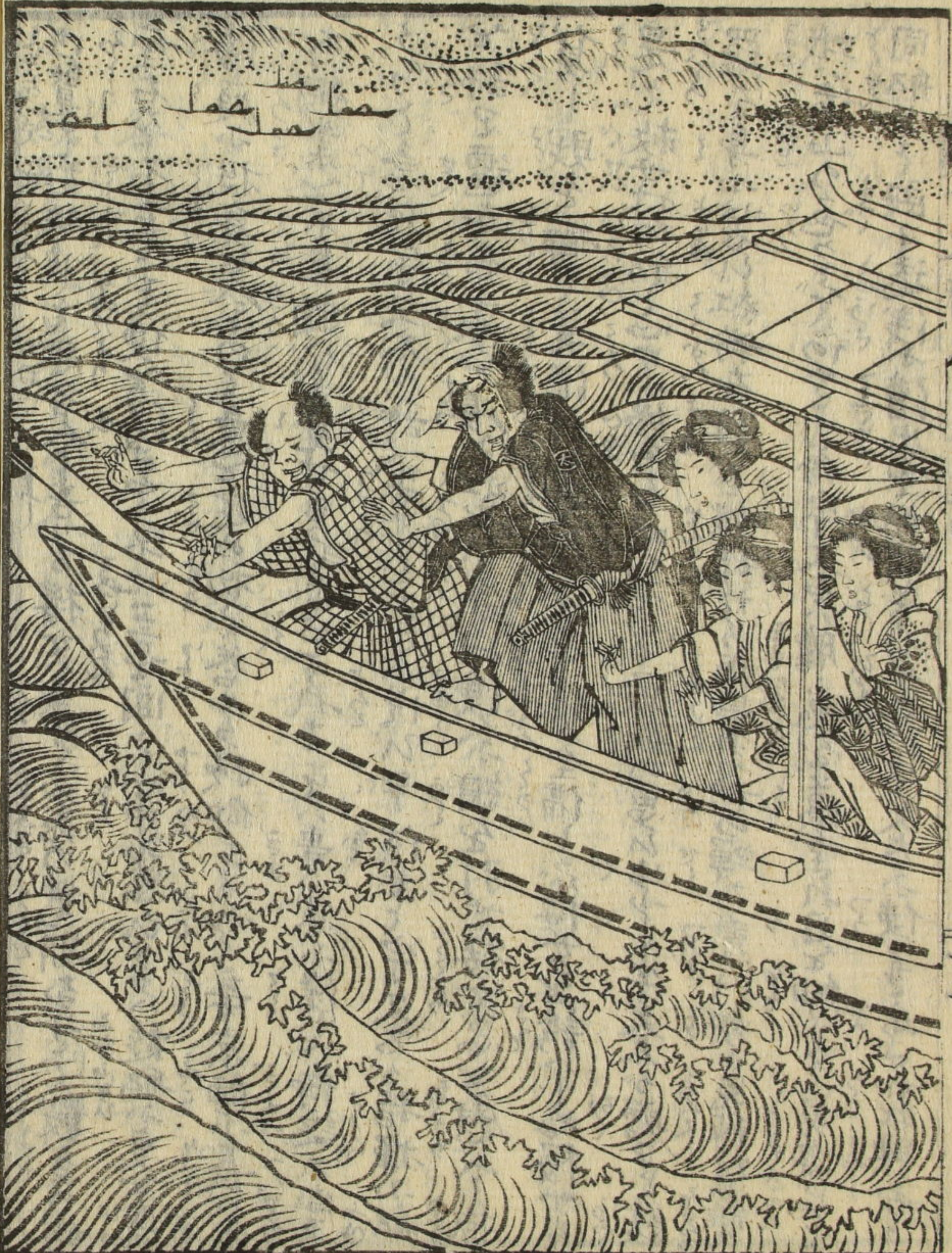
同小義清を心ばき誠小我先刻迄の盲人なるし今ハ毫髪をも數ふ詩
 眼精と成つと膝を拍く故馬嘆き清治夫婦も悲數を忘れつ
 天神地祇を感拜了此ハ策々廻りし橘女君を奪返し於其母多
 行方と回出し搦とく鎌倉小ひき身出度歸官させ参らせんと專ら
 専用意をせしむるを却説梅女ハ宇文方が別荘誘われ唯泣く宛て
 起りて梅女宇文方女使小命じ種々諫め慰むれどもはやくもめ
 不言食品をも不喫む宇文方太案小相違し不樂と雖も心短くて不抗
 と己ハ本宅小飯と尚婢さしく女抱させ種々け極真を勤めさせらる女使
 心得くはしん具合とて歌舞吹彈小る迄勸めどもれも梅女唯頭を
 低く答が小せられを殆とて梅女一人一個の婢が曰君はと都長
 多む絃歌香花ハ見阿さる人不如細干れ浦小出く遊船し臭細的のせ

此賢をを拜し思召ん言らる橘女ハ兼く必死の覺期をせし數々の婢
 座石を不去むを便を得るや此言を聞て心中思ひらる遊船小支を寄
 海庭小投身せんとて意を定め初く答らる梅女如く妾京師小長ハ未
 打網業と不見顔く見せむとてこれをもハ貴意ハ深ハ術説不違
 うちと急死宇文方詩告了も大急小悦び早催せし宇文方が指揮小船
 金飾と酒を布幕と張り衣い多く此漢人網を引せ橘女心を慰め掠
 貨ハ賤を擲り美酒佳者と調へ支十二分全備しハ橘女を誘しハ橘女
 是れ救其向船と心中佛名を唱せし最期の思ひ出しく宇文方が贈り綾
 羅を身小は衣い紅粉を粧へを婢婿たら両鬢ハ秋の蟬乃真け如く宛轉たる雙
 蛾ハ遠山の色とて梅女宇文方ハ膽鬼を湧き目細く見物已て
 同船して既小遠浅小漕出く奴婢等ハ早各け宇文方小使を去り如此興あり



櫻女苦節
投海底

新傳卷之五



櫻女苦節

拙燕を不知口官笑興し干俣小卑多細を穿て遠方小霞む島岐を
眺め多年の鬱を散しる宇文太兼て琵琶筑紫琴を舟中小るけ置ぬれ
桜女小曲を則登了桜女を平日深く好し業なきをいそ末朝の曲を奏
せん筑紫琴引寄と撞馴し朗詠て曰

忍著王衣裳
有聲當徹天

為人作春妍
有淚當徹泉

と美声を揚ぐ唱六將是谷の戸出は黄鳥の如く志を愁怨裡小籠きを
雲々寝々しく怨如く謝少如し此時間近き心の支は旅船一艘有が
瓜音出圃惚之帆を下錠を添て船を止めたる宇文太ハ妙曲心を湯く船を揚
てをかく秘し今曲をとりをむ桜女又琵琶を採り唱て曰

淚痕不學君恩新

拭却千行更萬行

と声益々悲しく唱ひ六天津之女を愛小降り海底の龍王も浮き出ると
無情宇文太上下心耳を清く聞惚たる油筋を見をす琵琶を捨身を
離し浪々たる波濤の中へ飛入たり宇文太王従大さ小周樟騒動たさ
誰助をさる者なり盃盤を踏碎さ血筋を蹴散しと河舟ありとひいたた
此時前の蓬舟より一個の女顯る出同じく海へ飛入たり是ハ何なるわかし
怪しむうち那婦桜女を招授し安々船小飛棄まが宇文太名指招き此方へ
賜れと呼りきとも耳おとさして錠曳揚真帆張るまがと宇文太たさ
惡夢此船漕手と雄燥む心得候漕出し既小那船近くなると旅船を
一個の尻躍出ると一笠前を曳張る兵と放てが先小立たり宇文太が胸板をつと

射通いぬこする何なにも心こころをなげき思おもう海底かきそこに投なげし矢ややや時ときふ使あて風かぜを
 吹ふき出だし旅たび船ふねは逸はな早く東あづまをさして飛と行ゆけを宇う文ぶん太たが下した僕わが名なをなげき術あそび
 なく幸あきやと死しを求もとめ這ころ宿しゆく所ところふゆと多おほく彼あつ旅たび船ふねは是こゝ禪ぜん月げつ龍りゆう岡おかを
 船ふね之の妙めう曲きよく小せう圓えん不ふ所思しゆひと一ひとに投なげ身みしと水みづ練れんの龍りゆう岡おかの如ごとく助たすけ
 上うへに後のち汐しほを吐つせ薬くすりを服のませと水みづ小せう入いれる程ほども故ゆゑ頓とんて蘇そ生せいし目めを
 冥ひきとれを又また不知しらず船ふねなる故ゆゑ驚おどろ怪あやし子こ細こを圓えん小せう禪ぜん月げつ委い細さいを言こと聞きせ
 ながしきとち船ふねは弥い海うみ上うへを走はり行ゆく

新編女水滸傳卷四終

鬼卯作

再開高臺梅 全六冊

北雲画

此の大意 沼田郡花火院布とうがし香
 津新伝を結ぶとのく娘おゑん父の歌と
 うゑんと千幸万苦をほわおゑんことなる
 事と面白く述べて入るなり

